

## 『宇治拾遺物語』と古典学習

井浪 真吾

### 一 研究の目的

周知の通り、高等学校用国語科教科書において、説話教材は入門教材として扱われることが多い。そこで説話教材に課せられている役割は、登場人物の言動や出来事に関する「おもしろさ」（『可笑しみ』）を通じて、学習者に「古文の世界に親し」ませることであろう<sup>1)</sup>。

しかし、言語抵抗のある文章をわざわざ読み、辿り着いた結果が右記のような「可笑しみ」で学習者が満足するわけがない。これが二度も三度も続き、機械的な品詞分解の授業に終始すれば、「古典はつまらない」、「古典に勉強する意義を見出せない」との意見が生まれてしまうのは当然である。竹村信治氏は十年以上も前の学習者を取り巻く古典学習の状況について、「教材選択の不適合、学習指導内容の表層性。これをまとめれば、教材、学習指導ともに、生徒のかかえもつ現実感覚や知的欲求にとどいていない古典の教室」<sup>2)</sup>と指摘しているが、現在の「古典の教室」もこれと変わらないであろう。

では、新たな古典学習の可能性を探るためにどうすればよいか。この問いをめぐる、近年、文学研究者が文学教育との架橋を試みている。例えば『文学』第十五巻五号（二〇一四年九月）では、「文学を教えるということ」という特集が組まれているし、『国語と国文学』第九十二巻十一号（二〇一五年十一月）でも「教育と研究」という特集

が組まれている。ここにあるのは「中等学校（中学校・高等学校）における国語教育と、国語学・国文学の研究とは、本来不即不離の関係にあったはずである。ところが、現在両者は不幸にして乖離しがちである」<sup>3)</sup>といった、文学研究と文学教育との「相互疎外状況」<sup>4)</sup>に対する文学研究者の危機意識であろう。

この状況を踏まえて、本稿では、高等学校での古文入門期の教材として採録されることの多い『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』）研究の研究論文の読解を通じて、教材研究の方法を探り、新たな古典学習の可能性を探っていききたい。

### 二 高等学校用国語教科書の中の『宇治拾遺物語』

高等学校用国語科教科書の中で説話教材が主に収録されるのは、「国語総合」、「古典A」、「古典B」の教科書である。いま、これらの科目の教科書に収録される説話教材が収められている説話集テキスト<sup>5)</sup>を挙げると、以下の通りである。

『今昔物語集』、『古本説話集』、『唐物語』、『今物語』、『古事談』、『発心集』、『宇治拾遺物語』、『古今著聞集』、『十訓抄』、『沙石集』

仏教説話集である『日本霊異記』や『撰集抄』、言談の記録である『江談抄』や『富家語』などは内容や文体などの制約からか、教科書に採録されない<sup>10</sup>。また、右に挙げた説話集テキストの中でも説話教材として採録されることが多いのは、『宇治拾遺』や『十訓抄』、『古今著聞集』、『沙石集』などの鎌倉時代（説話の黄金期<sup>11</sup>）に成立したテキストである。更に、これらのテキストから採録された説話教材、特に「国語総合」教科書中のそれを眺めてみると、「盗人の正体」（『古今著聞集』）、「孝孫」（『沙石集』）など、初期の説話研究において喧伝された「地方的・庶民的な、いわば雑多平俗な人間が活躍する有様を、事件的・行動的にとらえていきいきと描出」する、所謂「中世説話集の文学性」<sup>12</sup>が認められる説話が教材として採録されているように見える。

また、これは教科書の中の『宇治拾遺』についても言える。例えば、『宇治拾遺』の解説には次のようにある。

説話集。編者は未詳。十三世紀初めごろに成立。百九十七話から成る。仏教説話、法師・成人の逸話、民話的説話などを含み、人間的興味を中心とした庶民性・平俗性が特徴となっている。<sup>13</sup>

（傍線、稿者。以下同）

説話集。編者未詳。鎌倉時代初期の成立。百九十七話からなる。仏の功德や高僧の逸話などの仏教説話のほか、昔話や笑話なども収められており、平安から鎌倉にかけての人々の生活をうかがうことができる。<sup>14</sup>

これらによれば、『宇治拾遺』は、「人間的興味」から、「平安から鎌倉にかけての人々の生活」が反映された説話を多く収録し、その結果、「庶民性・平俗性」を帯びた説話集テキストとなっており、正に西尾光一氏の言う「中世説話集の文学性」と符合する。

では、具体的に『宇治拾遺』を出典とする教材はどのようなものが採録されているのだろうか。「国語総合」、「古典A」、「古典B」の教科書に採録されている教材を挙げてみると、次の通りである。<sup>15</sup>

「国語総合」教科書

- ・「児のそら寝」（第12段）
- ・「尼、地藏を見奉ること」（第16段）
- ・「絵仏師良秀」（第38段）
- ・「検非違使忠明」（第95段）

「古典A」教科書

- ・「百鬼夜行」（第17段）
- ・「袴垂と保昌」（第28段）
- ・「絵仏師の執心」（第38段）
- ・「きこりの歌」（第40段）
- ・「小野篁広才のこと」（第49段）
- ・「観音になった男」（第89段）
- ・「検非違使忠明」（第95段）
- ・「歌詠みの徳」（第111段）
- ・「応天門炎上」（第114段）
- ・「猿沢の池の竜のこと」（第130段）
- ・「夢を買う」（第165段）

- ・「呪いを知らせた犬」(第184段)
- ・「後の千金」(第196段)

「古典B」教科書

- ・「秦兼久悪口のこと」(第10段)
- ・「袴垂、保昌に会ふこと」(第28段)
- ・「唐に卒塔婆血つくこと」(第30段)
- ・「虎の鱔取りたること」(第39段)
- ・「小野篁広才のこと」(第49段)
- ・「清水寺二千度参り」(第86段)
- ・「検非違使忠明」(第95段)
- ・「獵師、仏を射ること」(第104段)
- ・「歌詠みて罪ゆるさるること」(第111段)
- ・「伴大納言応天門を焼く」(第114段)
- ・「亀を買ひて放つこと」(第164段)
- ・「夢を取ること」(第165段)

右記の通り、『宇治拾遺』から二十二の章段が説話教材として採録されている。この採録状況を見ると、「堂内から縁の下にひよいと移したと思つたら、それが実際には撰津国から九州肥前国まで移つていたという、鬼の超自然的な霊力を語る着想は奇抜でスケールも大きくおもしろい」(第17段)<sup>12</sup>といった物語内容のおもしろさを伝える章段、「夢占い、夢を取ること、夢の売買―夢にまつわる俗信の根強く生活化することを示す説話」(第165段)<sup>13</sup>と当時の俗信や生活を伝える章段、「老尼」(第16段)、「木こり」(第40段)、「獵師」(第104段)といった「庶民」が登場する章段が中心に採録されていると思われる。

更に、これらの各章段を教材とするにあたって、それぞれに「学習のてびき」が付されている。その幾つかを以下に挙げてみる。<sup>14</sup>

①登場人物の心中とその整理

【例】

- ・袴垂の保昌に対する心情は、どのように変化していったか。話の展開を追って整理してみよう。(第28段、教育出版「古典B古文編」)
- ・「帝ほほ笑ませ給ひて、事なくてやみにけり」から読み取れる嵯峨天皇の心情を話し合ってみよう。(第49段、三省堂「精選古典B」)
- ・「何の登らんぞ」とは、誰の、どのような気持ちを表しているか、説明してみよう。(第130段、右文書院「徒然草・説話・枕草子」)

②登場人物の行動の整理

【例】

- ・「僧たちわらふことかぎりなし」とあるが、それはなぜか。(第12段、東京書籍「精選国語総合」)
- ・通俊が「さりけり、さりけり。ものな言ひそ。」と言っているのはなぜか、話し合ってみよう。(第10段、桐原書店「探究古典B古文編」)
- ・尼が、極楽に行くことができたのはなぜか、考えてみよう。(第16段、明治書院「新高等学校国語総合」)

③登場人物の人物像

【例】

- ・絵を描くことに対する、良秀のどのような姿勢がうかがわれるか。(第38段、三省堂「精選国語総合」)
- ・獵師と聖は、どのような人間として語られているか。両者を比べな

がら考えなさい。(第104段、筑摩書房「古典B古文編」)

④話の興趣

【例】

・この話のおもしろさはどのようなところにあるか、話し合おう。

(第89段、三省堂「古典A」)

・当時の人々は、どのような点に興味を持ってこの話を語り伝えたのだろうか。話し合ってみよう。

(第95段、数研出版「改訂版高等学校国語総合」)

・この話でどのようなところを興味深く読むことができたか、話し合おう。

(第184段、三省堂「古典A」)

⑤語り手と語り手の登場人物に対する評価

【例】

・この話の語り手は、良秀をどのように見ているか、考えなさい。

(第38段、筑摩書房「国語総合改訂版」)

・「…とぞ、京に来て語りけるとぞ」とあるが、誰が語ったのか、明らかにしよう。

(第17段、三省堂「古典A」)

・この話の筆者は、伴大納言に対してどう感じているだろうか、話し合おう。

(第114段、三省堂「古典A」)

⑥内容に関する他のテキストの参照

【例】

・大地が陥没して海になるという伝説について調べてみよう。

(第30段、大修館書店「古典B古文編」)

・「応天門の変」やその周辺のできごとについて調べ、発表し合おう。

(第114段、三省堂「古典A」)

・備中守の子について、「夢を取られざらましかば、大臣までもなりなまし」と述べてある記事を参考に、当時の人々にとつて夢はどのように考えられていたか、話し合ってみよう。

(第165段、右文書院「徒然草・説話・枕草子」)

⑦表現上の工夫

【例】

・この話に臨場感を与えるために、表現上どのような工夫がなされているか、考えてみよう。

(第39段、桐原書店「古典B」)

・「この銭いまだ濡れながらあり」という表現の効果を考えてみよう

(第164段、第一学習社「標準古典B」)

登場人物をめぐる心情や行動の整理、出来事の整理、内容・登場人物・表現に対する語り手や学習者自身の評価、内容に関する他の伝承や史実に関する調べ学習など、様々な学習活動が提案されている。これらの中の①③⑥などは各章段の説話内容の確認とそれに関する背景知識の確認であり、説話内容の読み取りが主な目的であろう。とすれば、学習者が『宇治拾遺』の説話を読み、話の可笑しみに興じながら、『宇治拾遺』成立期の人々の生活を知ることが学習の目的となるであろう。

その一方で、④、⑤、⑦のように物語内容や登場人物、表現に対する語り手や学習者自身の評価を考えたり話し合ったりする活動も仕組まれている。しかし、語り手の登場人物に対する評価を考える活動は、例えば、「其後にや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めであへり」(第38段)、「いかにくやしかりけむ」(第114段)などの話末評の読み取りを

企んだものとも考えられる。また、話の興趣を学習者が評価する活動においても、確認・整理という学習活動から話の興趣を評価する学習活動が提案されており、穿った見方をすれば、他のテキストを参照しつつ、登場人物の行動の奇抜さや話の可笑しみを読み取ることを企んだものとも見える。

以上、『宇治拾遺』の各章段は、学習者が話の可笑しみに興じながら、『宇治拾遺』成立期の人々の生活にふれ、「古文入門」、「古文に親しむ」ことを果たすという目的のもとに教材として採録されていることがうかがえた。しかし、「一 研究の目的」でも述べたように、この学習目的では、古典の学習は知的欲求を満たさないつまらないものとなってしまふ。加えて、『宇治拾遺』の解説が西尾氏の「説話文学」観と符合した通り、『宇治拾遺』に対するテキスト観は更新されていないままである。<sup>15</sup>

如上の問題点の解決法を探るため、以下では、『宇治拾遺』に関する先行研究について詳しく見てみたい。

### 三 『宇治拾遺物語』の表現性

戦後、『宇治拾遺』に関する論考として目をひかれるのは、西尾浩一氏、益田勝美氏、三木紀人氏らの一連の論考<sup>16</sup>である。その中でも特に益田氏が「中世的諷刺家のおもかげ——『宇治拾遺物語』の作者——」(『文学』第三十四卷十二号、一九六六年十二月)の中で提出した「連想の糸」、「巡り物語」、「主体の批評の眼の複眼化」はその後の『宇治拾遺』研究に大きな影響を与えた。それを継承し、一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、『宇治拾遺』の表現性について新たなことが明らかにされていった。それらの研究の手法について竹村氏が次のように概説している。

作品を「一個の自律的な表現体」「所与のエクリチュール」として読み解くことを「一先ず」の方法とするとの、いくぶん戦略的な物言いは、かような宇治拾遺ひいては説話集研究の方法論的な閉塞状況についての判断を前提とし、直接的には、昭和五十年代の小峯和明・森正人両氏による今昔物語集研究の方法論の開拓とその成果に学んだものと観察される。<sup>17</sup>

それまでの説話研究では、説話の伝承過程や同話や類話との比較による差異の発見、「王朝文学」や「仏教文学」に見られない民俗性や庶民性の発見などが主に行われていた<sup>18</sup>。しかし、小峯和明氏の『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院、一九八五年)、森正人氏の『今昔物語集の生成』(和泉書院、一九八六年)を嚆矢とし、説話集を「一個の自律的な表現体」、「所与のエクリチュール」として読み解く説話集研究が『宇治拾遺』研究にも到来した。言い換えれば、小峯氏や森氏の『今昔物語集』研究で見出された、テキストを静的に捉えるのではなく、動的に捉えるというテキストの捉え方<sup>19</sup>が、『宇治拾遺』の表現性をめぐる研究にもたらされたことを竹村氏は述べているのである。また、そのような方法で『宇治拾遺』を読み解いている代表的な論者として、竹村氏は荒木浩氏、小峯和明氏、佐藤晃氏、森正人氏の四者を挙げ、彼らの手法について言及し、自身も『宇治拾遺』の幾つかの章段を読み解きながら、『宇治拾遺』の表現性を探究する。本稿もこれに倣い、荒木氏、小峯氏、佐藤氏、竹村氏、森氏の成果に学びながら、教材研究の方法を以下に探っていきたい。

最初に、いち早く『宇治拾遺』に注目し、多くの論考を積み重ねた佐藤晃氏と荒木浩氏の『宇治拾遺』研究に注目したい。

佐藤氏は『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法（『日本文芸論叢』第三号、一九八四年三月）の中で、益田氏の論の重要性を次のように述べる。

益田氏は、一見何のつながりも存在しないように思われる各説話の間に、微妙な連想の展開があり、『宇治拾遺物語』は、この「連想の糸」によって、自由奔放にさまざまな内容の説話を配列させていったものである、と述べられたのである。（中略・稿者）益田氏は、この「連想の糸」による説話配列を、「角度を変えては、物語る話をつかみ直し、見直しして、次の話呼び起こしていく手法」と呼ばれた。そして、この「手法」において、「主体の批評の眼も複眼化し、より自由なものに成長していった」ような精神性を、編者Ⅱ表現主体に付与しておられる。実は、この点こそ氏の論の重要性はあったのである。つまり、説話の配列とともに流動し、変容していくような編者Ⅱ表現主体の精神のありようを、この「手法」の中に据えられたということがそれである。<sup>20</sup>

説話を排列しながら、「角度を変えては、物語る話をつかみ直し、見直しして、次の話呼び起こし」、「批評の眼」が「複眼化し、より自由なものに成長してい」く『宇治拾遺』の表現過程に佐藤氏が焦点を当てようとしていることがうかがえる。

そうして、『宇治拾遺物語』の和歌説話―主題の相互関連性の視点から―（『日本文芸論叢』第二号、一九八三年三月）では、和歌に関する説話が排列されている第四十段―第四十三段、第四百四十六段―第五百十段に主に着目し、次のような見方を獲得する。

すなわち、『宇治拾遺』におけるこれらの和歌説話においては、和歌という題材に対する正と負との方向性を持った主題化がなされた説話が、相互の説話間での価値の転倒といった、主題の相互関連性を重視する視点から配列されているということであり、ここでは、正から負へといった価値の相対化による説話相互の動態性が意識されているのではなからうか、ということである。<sup>21</sup>

また、前掲の『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法」では第三百三十六段―第四百五段の仏教に関する説話が排列されていることに着目し、次のように述べていた。

このような一話ごとに見られる視点の流動と一時的な停止は、同時にまた、説話の配列の流れにおいては、説話の中心的・主題的な部分を横目で睨みながらも、周辺から周辺へと連想をつなげていき、時として、中心的な部分へと還つたりもするような、きわめて変化に富んだ往復運動を生み出しているといえるのではないだろうか。<sup>22</sup>

益田氏のいう「複眼化」を右記傍線部と認め、更に、（b）で獲得した見方を引き継いで、次のように述べる。

すなわち、一見単なる類纂的に見える説話群において、編者は、同じ題材に対して意味づけられていく説話の主題的な部分においても、これを横目で睨み据えながら説話を配列させていき、一群の説話における主題の相互関連性の中に、価値の相対化をなしとげておいたのではないかと考えられるのである。<sup>23</sup>

益田氏の論に学び、題材を同じくする説話排列を検証することによって、佐藤氏が見出した『宇治拾遺』の表現性。それは、ある題材に対する正の方向性をもつ説話と負の方向性をもつ説話とを排列したり、説話内容の中心部で関連する説話同士だけでなく周辺部で関連する説話同士を排列したりすることによって果たされる「価値の相対化」であった。

これ以後、佐藤氏は、「細部においてどのような語りの志向性を持っているのかを探ってみる必要があると思われる」<sup>24</sup>と、説話排列から各章段の語られ方に目を移していく。その際、『宇治拾遺』の表現性として、佐藤氏の念頭にあったのは、「価値の相対化」、「視点の流動」であったと思われる。例えば、『宇治拾遺物語』における言語遊戯と表現」（『日本文芸論叢』第四号、一九八五年三月）で、登場人物が機転の利いた言い回しや、同じ語が何度も繰り返される説話の語られ方、登場人物の動きの滑稽さを象る語り方などに着目し、これらの「言語遊戯」が『宇治拾遺』の多くの章段に見出せることから次のように述べる。

こうした言語遊戯そのものへの志向が、さらに細部における言語遊戯を誘発し、語りを活性化していく表現の生成過程には、語られる話を一律に秩序づけることとは無縁な精神性が見られるように考えられる。（中略…稿者）自らの志向において話を受け入れつつも、実は、話に引きずられ、自らを移動させていく、いわば戯れる主体とでもいべきものが、このような語りの主体なのである。<sup>25</sup>

説話排列から説話の語り方に目を移し、「価値の相対化」は「一律に秩序づけることとは無縁な精神性」と、「視点の流動」は「戯れる主体」と継承しながら、佐藤氏は『宇治拾遺』の表現性に対する考えを深めていく。

更に、佐藤氏は同話関係や類話関係にある説話と各章段を比較しながら、各章段の登場人物の描写や話の展開などに注意を向け、身体動作に関する描写や登場人物の問答による話の展開が多く見られることにも触れながら、「演ずる主体—『宇治拾遺物語』の表現機構—」（『文芸研究』第百十九号、一九八八年九月）で次のように述べる。

演ずる主体は、自らが寄り添う出来事や人物の言語・身体的動作等と相即的に戯れる。しかし、そこには、それらをより効果的に際立てるような仕掛けによってなされる語りの行為があるのである。すなわち、語られる話に参入し、これと戯れることによって、その戯れる対象の面白さがより興味本位的、かつ没主体的に提示されるのである。（中略…稿者）話の内容を意味づけによって枠にはめて提示するのではなく、その話が語り（＝読み）の過程で放射するであろう作用に溶け込みつつ、これをより効果的に再現し読者に提示する、それが『宇治拾遺』なのである。<sup>26</sup>

『宇治拾遺』は、説話の読みにおける享楽性を追求した説話集といえるであろう。それは、説話集形成の力学についての方法的自覚に基づいていると思われる。自由な連想と一義的な意味づけの拒否、それらは、説話集の形成に（多かれ少なかれ）伴う編纂と叙述の連携における相剋を、むしろ逆手に取った態度である。説話集形成の裏を突いた機構によって、読者に演戯を提供する「物

語空間」、それが『宇治拾遺物語』であるといえよう。<sup>27</sup>

「価値観の相対化」は「一義的な意味づけの拒否」へと、「視点の流動」や「戯れる主体」は「語られる話に参入し、これと戯れること」によって、その戯れる対象の面白さがより興味本位的、かつ没主体的に提示」されるように語る「演ずる主体」へと深められていることが分かる。

益田氏の論考による学びから始まり、説話排列、各章段の語り方に着目し、佐藤氏が認めた『宇治拾遺』の表現性とは次の通り概括できるのである。すなわち、同じ題材を扱った説話でも対極的な方向性を持つ説話を排列したり、結びつきが強いように思われる説話だけではなく、結びつきが弱いように見える説話も排列したり、それを一つの章段として語ってしまったりもする「自由な連想」のもと、「話の内容を意味づけによって枠にはめて提示するのではなく、その話が語り（＝読み）の過程で放射するであろう作用に溶け込みつつ、これをより効果的に再現し読者に提示する」語り方や説話排列、そしてこれらの「連携における相剋」により、「一義的な意味づけ」を「拒否し」「価値観の相対化」を企み、「説話の読みにおける享楽性を追求した」表現性、これこそが『宇治拾遺』の志向する表現性だということである。

次に荒木氏の一連の論考に着目する。荒木氏は、「異国へ渡る人びと——宇治拾遺物語論序説——」（『国語国文』第五十五卷一号、一九八六年一月）の中で第九十一段と第七十段について、読み手が一方を読みながらもう一方を想起するであろうこと、また、両章段の表現の類似箇所から、『宇治拾遺』の書き手（＝表現主体）の側もそれを目論んで

いたであろうことを、次のように述べる。

説話自体の連想と『宇治拾遺』の形成した表現により、読者は二つの説話を一つの出来事のように、或いは、全く別話ではない、類話として把握し、両者のイメージを重ね合わせて読むことになる。二つは相隣して並べられているのでは無く、物語の中で遠く離れた場所に位置しているから、それはあくまで、遠い思い出のように幽かに憶い起こされて、次第に重ね合わされる。<sup>28</sup>

更に、他の章段にも検討を加え、次のように述べる。

数十話離れた二つの説話が、今まで見てきた様なかたちで接合して意識されるのであれば、読者は、その間にあった数々の説話がばらばらに存在していたり、もしくはいくつかの固まりを成して点在しているのではなく、ある設定された時間、『宇治拾遺物語』という世界の中で連続した統一体を形成している、というかんじを抱くのではないだろうか。<sup>29</sup>（傍点、ママ）

そして優れたこの読書体験を、『宇治拾遺』の他の章段を読む際に持ち込んで論証し、更に『宇治拾遺』の表現性から捉え直し、『宇治拾遺』を読み解く上で必要なことを次のように述べる。

これまでの読解から浮び上がる『宇治拾遺物語』の方法とは、予定された調和を無意識裡に望み、それまでに読み経験してきた物語世界、具体的には、一つ一つの説話の展開の論理、に沿ってつづき説話を読み、結末を予想しようとする読者に対して、或る種

の挑戦を繰り返すことであった。そのためには逆に連想を喚起するような説話を連続して配列し、微妙な表現の歩調を合わせることも敢て行い、それを達成していった。

よって『宇治拾遺』を読み解くためには、一話一話の説話的背景を正確におさえていくことと同時に、一説話を一つの価値観に固定せず、比喻を以て言うなら、数多くの読みを繰り広げて派生した横糸を、『宇治拾遺』が提示する物語世界の流れのいくつかの縦糸との交叉する点で把握していく、といった困難な作業がある。<sup>30</sup>

『宇治拾遺』とは、各章段の「説話的背景」をよく知る読み手は、『宇治拾遺』を読み進めていく内に、各章段の表現に敏感に反応し、そこから章段同士の関係を読んで、統一した物語世界を構築してしまったり、時には予想を裏切られてしまったり、読み返してみても再構築してみたり、といった読みの往還を経験するように表現が仕組まれた説話集テキストであることが述べられている。そして、「宇治拾遺は才ほど読む。読者の才に応じて多彩な風貌を覗かせる『宇治拾遺』<sup>31</sup>と述べるように、『宇治拾遺』は一義的な物語世界を達成しようとして、各章段に意味を付与するのではなく、読み手の自由な解釈を前提に、読み手を試す説話集であることが述べられる。

これに続き、荒木氏は『宇治拾遺』の読書体験を基に、論考を積み重ねていく。「宇治拾遺物語の時間」(『中世文学』第三十三号、一九八八年六月)では、類似した話柄の章段同士や、同じ登場人物に関する章段同士、登場人物のあいだに関係が見出せる章段同士、末の三つの章段に注目し、「終末へ確実に進行」<sup>32</sup>する時間、「『宇治拾遺』の根幹に」「たくましい笑いの精神が横溢」<sup>33</sup>する様を読み取る。また、「へ

次第不同の物語——宇治拾遺物語の世界——(説話と説話文学の会編『説話論集第一集 説話文学の方法』、清文堂、一九九一年五月)では、序文に続けて、古本系の内題の位置に注記される「宇治拾遺物語 第一 抄出之次第不同也」を祖上にのせつつ、『宇治拾遺』中に頻出する「こはいかに」や、章段同士の類似した表現に注目し、『宇治拾遺』と読むことや読み手との関係について言及する。それに続けて「ひらかれるへとき」の物語——『宇治拾遺物語』の中へ(『国文学』第四十卷十二号、一九九五年十月)では、伴善男に関係する章段(四段、百十四段)を中心に取り上げ、『宇治拾遺』の表現性について次のように考えを深める。

『宇治拾遺』は、すでに色々な形で指摘が進みつつある、全体を視野に置いた周到な作意の下、書かれたテキスト・エクリチュールとして、たとえば、すでに読み通してきたテキストを踏まえ、振り返るような——いくどか再読することをも含めて——読書行為を前提として「書かれ」ているのではないか。『更級日記』作者のような、孤としての個人の、暗記してしまうほどの丹念な、黙読を許容するところまで。<sup>34</sup>

そして『宇治拾遺物語』再読とその方法——デジタル社会の中の説話文学研究——(『説話文学研究』第四十三号、二〇〇八年七月)では、デジタル社会下での文学研究について、『宇治拾遺』を例として取り上げ、地蔵関連章段、観音関連章段の分布について言及する。なお、荒木氏はこれら五つの論考を、著書である『説話集の構想と意匠——今昔物語集の成立と前後』(勉誠出版、二〇一二年)の中で「第四章 宇治拾遺物語の意匠と世界」としてまとめている。

以上のように、荒木氏は『宇治拾遺』全体を通して読んだときの印象をもとに、その印象の原因を表現の類似や説話内容などの類似などに見出し、説話集としての『宇治拾遺』の表現性を探ろうとした点に新しさがある。

また、佐藤氏、荒木氏の両氏の『宇治拾遺』研究を継承し発展させたものとして、『今昔物語集』を主な研究対象としていた森氏、小峯氏、竹村氏の『宇治拾遺』研究がある。

森氏は自身の提唱した「編纂行為・説話行為・表現行為」の水準で説話集の表現性を分析するという手法<sup>35</sup>を念頭に置き、『宇治拾遺』の表現性を一連の論考の中で分析していく。その中で、説話同士の連想、対比、転換や各章段に見られる韜晦的な説話の語り方、あたかも〈巡り物語〉であることを宣言しているかのような序文<sup>36</sup>、説話内容と話末評との不整合、同語・同音異義語・語形の類似する語の反復使用といった言語遊戯による意味の滅殺や重層化、それによって引き起こされる読み手の視線の分散<sup>37</sup>を指摘する。そして、「宇治拾遺物語は、説話を意味や価値から解放し、編纂主体の立場をことさら消去し、韜晦することによって成り立っている説話集であった」<sup>38</sup>、「逆に読者は読まされてしまい、その読むあるいは読まされる行為を宇治拾遺物語が批評する関係にある」<sup>39</sup>と、佐藤氏や荒木氏の成果を採り入れながら論じる。森氏の一連の論考は、佐藤氏や荒木氏によって述べられていたことをより深め、分析の観点などを精密にしたという点で非常に有意義なものであった。

次に、小峯氏は中世に特有の語である「ひしめく」という語に注目し、それが『宇治拾遺』にもしばしば見られることから、『宇治拾遺』にも多分に同時代的な表現志向が認められることについて言及する<sup>40</sup>。そしてここを出発点としながら、これまで述べられてきた『宇治拾遺』

に見られる「享楽性」、「遊戯」、「意味や価値からの解放」などが、同時代の芸能である〈猿楽〉と相同性が認められるとし、『宇治拾遺』の表現性を「方法としての〈猿楽〉」<sup>41</sup>と名づける。更に、〈偽悪〉譚や〈狂惑〉譚が『宇治拾遺』に多く見られること、話型や伝承を模倣しては意味をずらしたりひっくり返したりする説話語りが『宇治拾遺』に見られることから、〈もどき〉の視点から『宇治拾遺』の表現性を分析する<sup>42</sup>。このように『宇治拾遺』の表現性を同時代の表現時空において再考した点で小峯氏の果たした役割は大きい。加えて、これらの論考をまとめ、初の『宇治拾遺』単独の論著と成したことも特筆すべきことである<sup>43</sup>。

最後に竹村氏の論考に注目する。竹村氏はまず、これまで注目してきた四氏の『宇治拾遺』論が、益田氏の提唱した「連想の糸」〈巡り物語〉を引き継ぎ、それぞれの視点で論を展開したことについての次のように概括する。

稿者の理解によれば、相対的な特徴として、佐藤氏は表現形成の機構そのもの、及び表現形成と表現主体とのかかわりを、小峯氏は作品の表現性と時代の表現時空とのかかわりを、森氏は作品の語り（編纂と説話叙述）における表現のしくみと作品の表現性を、そして荒木氏は表現のしくみとともにそこから統合的に読み取りうる作品表現の中身を、それぞれの関心の所在としていると観察される。

かようにして、四氏の表現論は、それぞれ独自の観点から論を構成するものと認められるが、宇治拾遺の表現性として注目するところはほぼ共通している。すなわち、「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまぐ、したたかな（語り）」と戯笑性がそれである<sup>44</sup>。

ここを出発点とし、竹村氏は「宇治拾遺」の表現性の成立するところは、享受者の「読み」が生成される」とし、「読み」が「成立する条件、前提といったことをあらためて考え、そこから作品の表現位相を窺おう」とする。<sup>45</sup>そこで、これまで注目してきた四氏が言及してきた手法で第二十段を分析する。第二十段は天下干魃、六十人の僧による祈雨も験なく、世の人々は皆慨歎していた。その時、増命が異例の抜擢で祈雨僧に選出、増命は見事に期待に応え、降雨に至るといふ説話内容をもつ章段である。一読すれば、増命の法験を称賛しているかのようにあるが、四氏の言及してきた手法で分析すると、「増命の名利を求める姿を描くものとなる」と読み替えが起ることを指摘する。更にその仕掛けとして、祈雨日記や僧伝などに見られる祈雨法験譚の文体を模倣していることを指摘し、次のように述べる。

賞をきそい、験を主張し、自らを称揚する寺家僧侶の様態を写しとどめたものがこれらの記録（稿者注・祈雨日記・祈雨法記など）であつてみれば、名利は賞賛の文体に内在する。宇治拾遺話における文体の模倣は、さような祈雨法験譚の二面性の発見に基づき、それを暴こうとしたものとする事ができるだろう。<sup>46</sup>

かように第二十段では祈雨記録の文体模倣が為され、それに気づいた読み手は増命の名利を求める俗な姿により一層目が向いてしまうことになるだろう。とは言え、竹村氏も言及するように、読み手が文体模倣に気づかなければ表現は成立しない。まさに「読者の才にに応じて多彩な風貌を覗かせ」るのである。

更に竹村氏は他の章段にも注目し、文体の他にもモノ・コトのモチーフや話型などの読み手の「才」（＝知）を読み手自身が各章段

に参入させることによつて『宇治拾遺』の表現が新たな形で成立することを例証していく。加えて、そのような『宇治拾遺』の表現性が、同時代の諸テキストの表現性と相同性を認められることについても言及し、次のように『宇治拾遺』の表現性についてまとめる。

むしろ作品は自己確定を保留しつづけているかのようにさえ見える。しかも、相対化は宇治拾遺に限らない。宇治拾遺とは、相対化を目的化したような表現世界の形成を背景に、多線化した意味の系列を上述の手法をもって作品に仕掛け、意味系列間の懸隔、つまり差異を往還する「読み」とその興味をこそ物語空間に実現しようとしたものではなかったか。<sup>47</sup>

また、竹村氏はこの約六年後、M・バフチンなどを援用しながら『宇治拾遺』論の集大成を発表する。その論考は、「説話の言述——『宇治拾遺物語』から——」（説話と説話文学の会編『説話論集第七集 中世説話文学の世界』清文堂、一九九七年十月）であるが、これは後に氏の著書『言述論——説話集論』（笠間書院、二〇〇三年）に「I 説話の言述——説話の言語過程」として収録されている。竹村氏は、フーコーの言説論やバフチンの対話論など、「実に多様な現代思想への思索をコンテキストとし」<sup>48</sup>、テキストの表現性の分析を、「まとまったことがらを伝達する」過程における、「話し手を世界の現実へとつねに新たに結びつけ直す」物語行為＝言表行為＝言語行為の「一回限り」の行為性、出来事性<sup>49</sup>、をめぐる分析である。「言述論」として『宇治拾遺』の表現性を捉え直す。これまで言及されてきた『宇治拾遺』の表現性を、テキスト全般に関わる「言述論」として捉え直した点で、竹村氏の果たした役割は非常に大きい。

以上、『宇治拾遺』の表現性がどのように言及されてきたのかを見てきた。それぞれの言及は、当然のことながら各氏の関心に従って述べられたものであり<sup>50</sup>、そこに目を向けずに論をひとまとめにすることはできない。しかし一方で、竹村氏も総括していたように、表現性について、指摘されてきたことには重なりが見られた。この点を考慮すれば、ここまで諸氏が明らかにしてきたことを総括することは無意味ではないだろう。そこで、稿者の関心が竹村氏の「言述論」にあることから、これを中心に他の氏の論を援用して、『宇治拾遺』の表現性について述べ直すと、次のように言えようか。

#### 【『宇治拾遺物語』の表現志向】

○「『宇治拾遺物語』の言述は、「世界」に流通している複数の“ことば”を「鋭敏な聴覚」をもって認知する〈発話主体〉が、伝えられる〈他者のことば〉、また、それをめぐる「他者の言葉」、〈読者〉や場の返答として予期される“ことば”などへの応答として彼の“言葉のパレット”からそのそれぞれの“ことばのジャンル”（＝言説性）を認知、選択し、これらを展開させ、その展開の全体を発話行為の現在に捉え直すことで彼の現在にかかわる問題領域を開いていく、そうした過程としてある」<sup>51</sup>。

○「選択された“ことばのジャンル”のいちいちがこれに適応（＝一体化）してみせる〈語る主体〉たちを介して演じられ、その演技をつうじて語りが生成、展開」<sup>52</sup>。

・「選択といい、一体化する演技（＝“適応”）といい、しかしそれらの応答の様態は、対象やそれをめぐる「他者の言葉」の“ことばのジャンル”性（＝言説性）への親和的な同化、予期される〈読者〉や場の返答の“ことばのジャンル”性（＝言説性）への相即的な随順と

してあるばかりではない。（中略・稿者）すなわち、応答しての発話は、認知選択された“ことばのジャンル”に一体化して語られているように見えながら、それと相即的に同化するばかりではなく、演技の内別の視点、違和異義反論を含んだものとしても行為されているのである」<sup>53</sup>。

○右記の具体として

#### 【説話行為、言語行為】

- (I) 「没主体的」に、登場人物の問答や行動によって語が展開し、「面白さがより興味本位的」になる語り。
- (II) ヒト・モノ・コトのモチーフ性を響かせたり、文体を模倣したりしつつ、一方でそれらとの落差を仕組む語り（＝〈もどき〉）。
- (III) 「同語・同音異義語・語形の類似する語の反復使用」といった言語遊戯による「意味の減殺や重層化、それによって引き起こされる読み手の視線の分散」。
- (IV) 説話内容と話末評との齟齬。
- (V) 戯笑による意味のはぐらかし。

#### 【編纂行為】

(VI) 『宇治拾遺』内の「既に記された説話を想起させ」、「説話の中の心的・主題的な部分」や「周辺」的な部分との「連想、対比、転換」により、「眼前に読み進めている説話の読みを刺激し、動揺させて」、「より拡がった説話世界を形成」。

(VII) 説話同士の「連想・転換・対比」などにより、『宇治拾遺物語』という世界の中で連続した統一体を形成している、というかんじ<sup>54</sup>。を読み手に与えたり、それを裏切ったりする（＝「一義的な意味づけ

の拒否)。

(Ⅷ) 上記のことを達成するために、説話内容、表現の類似、読み手が連想しやすい説話の『宇治拾遺』への収録、説話分布の工夫。

#### 四 『宇治拾遺物語』の章段分析の実際

ここまで『宇治拾遺』の先行研究で述べられてきた表現性について見てきた。これをもとに、『宇治拾遺』に収録された章段を分析する際の観点をまとめてみれば、次のように提示できるであろうか。

##### (i) 『宇治拾遺』のテキスト観

- ・「宇治拾遺は才ほど読む。読者の才に応じて多彩な風貌を覗かせる」。
- ・「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまぐ、したたかな(語り)」と「戯笑性」。
- ・『宇治拾遺』は、説話の読みにおける享楽性を追求した説話集」。
- ・「語られる話を一律に秩序づけることとは無縁な精神性」。

##### (ii) 同話・類話との比較

- ・ヒト、モノ、コトにおいて違いは見られるのか。
- ・『宇治拾遺』話にしか見られない表現はどのようなものか。
- ・同話、類話にしか見られない表現はどのようなものか。
- ・同じような内容を表していながら、表現がどのように異なっているか。
- ・同話、類話との文体の一致度はどのようなものであるか。
- ・同話、類話はどのように意味づけようとしているか、あるいは意味づけを拒もうとしているのか。また、それは成功しているのか、失敗しているのか。これらを同話、類話の話末評、説話排列、収録された

巻、語り方などから探れるのか。

##### (iii) 説話の語られ方

- ・説話全体の語られ方はどのようなものであるか。
- ・話末評はどのようなものであるか。また、それは説話内容と齟齬をきたしているのかどうか。
- ・ヒト、モノ、コトのモチーフ性はどのようなものであるか。また、事実関係に照らしてどうであるか。

(ii) での異なりはどのようなことが起因しているのか。逆に異なりが見られないのはなぜか。

- ・模倣している話型や文体はあるのか。あれば、それとの異なりはどのようなところに見られるのか。
- ・言語遊戯はあるのか。あれば、それはどのようなことを実現しているのか。

##### (iv) 説話排列、説話の位置

- ・説話排列はどのようなものであるか。また、それらによるどのような「連想・対比・転換」が起こり、各章段にどのような読み替えが起こるのか、あるいは起こらないのか。
- ・『宇治拾遺』内に類似する説話内容や類似する表現をもつ章段はあるのか。あれば、それらとどのような「連想・対比・転換」が起こり、各章段にどのような読み替えが起こるのか、あるいは起こらないのか。

##### (v) 各章段の言述

- ・(ii) (iii) (iv) を通して、どのような言説と対話し、どのような

言説を参照し、どのような問題領域をめぐるか、どのように応答しようとしているのか。

この(i)～(v)の観点で以て、実際に『宇治拾遺』の章段における分析の具体を提示してみたい。

まず取り上げるのは第一段である。この章段は仏教に関係する説話内容だからか、あるいはそれに僧と女性との交接といういかかわしい要素が含まれるからか、高等学校用国語教科書には採録されていない。一方で、『宇治拾遺』の表現性を端的に表している章段として、『宇治拾遺』研究では取り上げられることが多い章段でもある。

『宇治拾遺』第一段の梗概は以下の通り。能読の道命阿闍梨が和泉式部との交接の後、「心をすまして」法華経を読み、まどろんでいると、道祖神が道命のまえに現れる。道命がわけを聞くと、「こよひは御行水も候はで」法華経を読んだので、普段聴聞に来ている梵天や帝釈天が汚れを厭い、聴聞に來なかつたのでその隙にやつてきたと言うのである。この一連の出来事が語られた後、『往生要集』の書き手として著名な源信が「念仏、読経、死威儀をやぶる事なかれ」と「いましめ」て結ばれる。

同話関係にあるものとして、『古事談』第二百三十一段がある。この章段では、「其の音声微妙にして、読経の時、聞く人みな道心を発す」と道命の能読ぶりが初めに紹介される。その直後、「但し好色無双の人なり」と語られ、第一段と同様の出来事が展開される。

『宇治拾遺』第一段と『古事談』第二百三十一段とを比較すると、(A)『古事談』話は能読の道命の好色めいた逸話として第三者の説明的な語りで語ろうとしているが、『宇治拾遺』話は道命と道祖神との問答を中心に説話が語られ、(発話主体)の意義づけは明示されて

いない。

(B)『古事談』話は記録体で語られているが、『宇治拾遺』話は和文体である。

(C)不浄説法に対する源信による戒めという後日談が『宇治拾遺』話には付される。『古事談』話には付されない。

(D)『古事談』話では「五条西洞院の辺に侍る翁なり」としか述べられないが、『宇治拾遺』話では、本文中には「五条の斎」と、標題には「道祖神」と、「翁」が道祖神であることが明示されている。

など大きく四つの異なりが見られる。これらを踏まえながら、『宇治拾遺』第一段を分析していく。

まず、(A)(B)(D)に関わって、『宇治拾遺』第一段ではヒト、モノ、コトのモチーフ性がどのように響かせられているのかを探ってみたい。まず、道命に関する説話は諸テキストに散見でき、例えば『法華験記』巻下第八十六には、ある老僧が、「金峰山の藏王・熊野権現・住吉大明神」が道命の読経の聴聞にやつて来、「住吉明神」が「松尾明神」に対して「日本国の中に、巨多の法華を持する人ありといへども、この阿闍梨をもて最第一となす」と言うのを夢に見たという逸話を見ることが出来る。他にも『今昔物語集』には、道命の読経について、「其ノ音微妙ニシテ、聞く人皆首ヲ低ケ不貴ズト云フ事無し」と、道命に関しては能読の僧というモチーフ性があったことがうかがえる。

また、『古事談』話には見られない「道祖神」について見てみたい。「道祖神」については、三谷榮一氏が次のような指摘をしている。

サエの神、道祖神、道陸神といわれ、木や石の男根を祭るのは全国的といってよく、(中略…稿者)特に群馬・神奈川・長野・山梨

・伊豆などの地方では男女の双体の石像が多く、露骨な交合の姿  
態を見ているものもある。(中略・稿者)

(稿者補:『宇治拾遺』第一段の中で)夢に出現するというのは、更  
に暁における兩人の同衾を意味し、一層好色を強めている。<sup>54</sup>

性器を象ったり、男女の交接の姿態を象ったりした形態をもつ「道祖  
神」モチーフ性により、僧と女との交接を語る第一段に性的なイメ  
ージを強調することが分かる。また、この道祖神は道命の説経聴聞に  
来られたことに対して、「世々生々忘がたく候」、「うけたまはりさぶ  
らひぬる事の、忘がたく候也」と喜悅する様がひととき強調されてい  
る。

更に、和泉式部と「臥し」た後、「御行水も候はで」「経を、心を  
すまして読」み、「五条の齋」(＝道祖神)を喜悅させるという道命の  
行為。末尾に見える高僧源信の言からは、道命の不浄説法に対する批  
難を聴取することが可能であるが、その一方で道祖神の喜びに満ちた  
声に対して耳をふさぐことができない。道祖神の声に耳を傾けると、  
普段は「梵天・帝釈」の聴聞の故、近づくこともできなかった道祖神  
を、説経の功德に与らせることができたという面が強調されることに  
なり、この度の道命の説法は利他行の実践としても見えてくることに  
なる。不浄説法に対する批難か、不浄説法故の利他行の実践に対する  
称賛か。ヒト、モノ、コトのモチーフ性を知れば知るほど、第一段  
を一義的に捉えることはますます難しくなる。

また、先に挙げた『法華験記』話において見られた、素晴らしい説  
経により、格の高い神が多く聴聞にやってくると点と、第一段で格の  
低い神である道祖神が聴聞にやってくるという点を比べれば、第一段  
は『法華験記』話のような法華経能説譚のパロディのようになってい

ることも視野に入れておいてよいだろう。但し、『法華験記』話のよ  
うな漢文体、もしくは漢文訓読体の文体になっていないことから、意  
図的に模倣したとまでは言えないであろうが。

そして(C)に関わって、第一段末の源信の言葉に着目したい。こ  
れについては、森氏が次のように述べている。

この物語にはじめて接したとしても、物語本文から、好色と説経  
の両価併存、あるいは価値の相対化ということを読みとったと考  
えている読者も、評語が問題を著しく一面化し、ねじまげている  
と感じて当惑するにちがいない。<sup>55</sup>

源信の言で代用しながら、不浄説法を戒める立場で語られているよう  
に見える第一段であるが、説話内容との齟齬をきたしていると言うの  
である。その結果、「物語の主題らしきものを、評語は無効にしてし  
ま」<sup>56</sup>い、結局ここでも第一段は、一義的な意味づけから解放される  
ことになるのである。

ここまでは『古事談』第二三一段との異なりを中心に第一段がどの  
ように語られているのかを見てきたが、説話排列を視野に入れるとど  
のようなことが見えてくるであろうか。例えば、続く第二段は、平茸  
は「やるかたもなく」多く生える篠村の人々が夢で、「頭おつかみな  
る法師どもの、二三十斗」が別れを告げに来るのを見る。すると、翌  
年から平茸は全く見られなくなる。これに対して「説法ならびなき」  
忠胤が、「不浄説法する法師、平茸に生まる、といふ事のある物を」  
と言ったことを述べられ、「平茸は食はざらん、事かくまじき物な  
りとぞ」との話末評で結ばれる。

第一段の不浄説法をした道命と第二段の平茸に転生していたという

「不浄説法する法師」と、両章段はこの点において結ばれる。とすれば、第一段においては道命の不浄が前面に出ることになり、やはり第一段は道命の不浄説法を戒める章段だったのだと読み替えられるかもしれない。但し、第二段での「不浄説法する法師」は、忠胤の言に従えば「平茸」に転生し、結果的には「篠村」の人々の生活を助けていたことを鑑みれば、道命の利他行が前面に出ることになるであろう。加えて第二段は森氏が指摘するように、話末評と説話内容との齟齬が明白であり、「たとえば、因果応報たとえば不浄説法の戒めなど、この物語の主題らしきものを、評語は無効にしてしまつて<sup>57</sup>いる」という。その結果、第二段でも一義的な意義づけとは関係のないところとなり、第一段の道命の行為に決着をつけようとする読み手はここでもはぐらかされてしまう。

では、『宇治拾遺』内の他の章段との関係はどうであろうか。これについて、荒木氏の優れた読書体験が示すとおり、「和泉式部―男―小式部―法華経」という「連環」により、第三十五段を読み進める際に、第一段が想起され、イメージが重ねられることになるだろう。第三十五段は和泉式部の娘である小式部内侍の許に定頼中納言がやって来る。定頼が局の戸を叩いても、小式部内侍は戸を開けようとしな<sup>58</sup>い。というのもその時、小式部内侍は「時の関白」と同衾中だったのである。すると、「美声で知られる」<sup>59</sup>定頼は「経をはたとうちあげ」る。これを聞いた小式部内侍は「う」といひて、うしろ様にこそ、臥しかへ<sup>60</sup>つてしまう。小式部内侍と同衾中であつたのは「時の関白」であつて、読経をした定頼ではないという点において、和泉式部と交接後に読経をした道命とは異なる。但し、定頼の美声による読経を聴いた際の小式部内侍の反応、後日談として話末に付された「時の関白」の「さばかり、たへがたう、はづかしかりし事こそ、なかりしか」と

の感想、荒木氏による第三十五段との連想で小式部内侍と藤原教通との恋愛譚である第八十五段が想起されるとの指摘を踏まえれば、この第三十五段も性的な雰囲気漂う章段となる。そしてそれに第一段のイメージを重ねる読み手は、道命の不浄さが印象に残ることであろう。が、読経に魅了されるのは道命の相手である和泉式部ではなく、格は低くとも神である道祖神であり、魅了ではなく喜悅なのであり、第三十五段とは異なるのである。

以上、第一段を前述した観点に則して分析してきた。ここまでのことを踏まえると、第一段は、「道命」や「道祖神」のモチーフ性を利用したり、法華経能説譚をパロディ化したり、「道祖神」の言動を際立てたりすることによって、「(仏教)」という問題領域における、利他と戒不浄説法による自利という、本来は共に兼ね備えることが理一とされるもの<sup>60</sup>が対立を引き起こしてしまうことになり、一義的に第一段を捉えられなくなってしまう。更に、「語り手」が第三者的視点から説明するのではなく、道命と道祖神との問答により出来事が展開していること、話末評の代用となる源信の言も説話内容と齟齬をきたしてしまっていること、『宇治拾遺』内の他の章段との「連環」などにより、いつまでたっても第一段を一つの〈意味〉に収束させることができず、書き手も読み手も言説間で宙吊りのままになってしまっている。この点において、第一段は諸氏が指摘してきたような『宇治拾遺』の表現性を体現した章段となっているのである。

第一段は前述したとおり、高等学校用国語科教科書に採録されていない章段である。では、高等学校用国語科教科書に採録されている章段を同様に分析してみると、どうであろうか。そこで、『宇治拾遺』の章段の中で最も高等学校用国語科教科書に採録されている第十二段を取り上げる。この章段は「児のそら寝」として「国語総合」教科書

に採録されるよく知られた章段である。

第十二段は、比叡山の児と僧とのやりとりで出来事が展開される。お勤めを終えた「宵のつれづれに」、僧たちはかきもちひをつくることにする。するとそれを聞いていた児が、「しいださんを待ちて、寝ざらんも、わろかりなんと思ひて」、寝たふりをする。再三の僧からの呼びかけにも応答せず、寝たふりを続けていると、僧たちがかきもちひを食べる音がしたので、我慢できず飛び起きる。これを見た僧たちは「笑ふ事、かぎりなし」として話は結ばれる。

この章段は教科書ではどのように扱われようとしているのか。竹村氏は第十二段について、「国語総合」教科書に見られる学習のてびきをまとめ、「一話を狂言的な笑話と見なし、児と僧たちとの心理劇を再構成する学習への展開を構想したものであろう」<sup>61</sup>と述べている。また、これを裏づけるかのように、例えば、第一学習社『高等学校新訂国語総合古典編』の指導書では、第十二段についての「作品鑑賞」の項目に「寺の児の、少年らしい気遣いが裏目に出た笑い話である」、「大らかな人生のユーモアを素直に語ろうとしている」<sup>62</sup>との記述が見られる。

では、第十二段を分析してみると、どのようなことが見えてくるだろうか。第十二段は同話・類話関係に見られる説話が見られず、『宇治拾遺』独自の説話となっている。それ故、それらとの比較から見られる差異に注目するというのが出来ない。そこで第十二段をじっくりと読んでいくことになるのだが、読んでいるとある点に違和感を抱く。それは、これも竹村氏が引用しているように、新編日本古典文学全集「鑑賞の手引」にある「仕えている年少者に対しての丁寧すぎる僧たちの言葉遣いと対応ぶりの理由はなにか」<sup>64</sup>という点である。

「鑑賞の手引」が言及するのは、「物申しさぶらはむ」、「おどろかせ

給へ」、「幼き人は寝入給にけり」といった、僧の児に対する徹底した待遇表現のことである。これに違和感を表明する「鑑賞の手引」には、先の言に続けて「稚児愛的な状況を想定してみるべきではないか」と述べられる。「稚児愛的な状況」、これは諸テキストに見られ、例えば『古今著聞集』第三百二十三段には、「みめよく心ざまゆふ」である「千手」という御籠童がおり、それが謡った今様に心を動かされた覚性法親王が「たへかねさせ給て、千手をいだかせ給て御寝所に入御ありけり」と、顕然と稚児愛の様子が語られる。これはまさに「僧と児」のモチーフとして響くのである。

加えて第十二段とその前後の説話排列に注目してみると、第十一段から第十五段まで性的なことに関係する説話が排列されていることに気づく。性的な文脈に置かれた第十二段はそれとなく僧の稚児愛的な側面が示されることになるのである。

以上、簡単にはあるが第十二段を見てきた。第一段と同様の観点で以て分析してみると、第十二段には僧の稚児愛的なイメージが重ねられるという次第であった。これを踏まえれば、当時仏教のメッカであった比叡山延暦寺、そしてそこで修行する僧の権威、聖性といったものにいかがわしさが見出されるようになる。では、第十二段ではこれらが糾弾されているのかというとそこまでは言えない。というのも、前に見たように、表向きは「寺院の日常的情景の中に可憐な児をほほえましく映す」<sup>65</sup>章段として見えるように、表立った批判は見えないのである。僧と児との関係をめぐるモチーフ性、僧の児に対する徹底した待遇表現、『宇治拾遺』の仕掛けた説話排列に気づく読み手のみが、その幽かな批評の声を傾けることができるのである。まさに、「読者の才にに応じて多彩な風貌を覗かせる『宇治拾遺』」なのである。

## 五 『宇治拾遺物語』研究と古典学習

先行研究に学びながら、第一段と第十二段を具体的に分析してきた。ここで改めて言い立てるまでもないことではあるが、それらはテキスト分析であって、教材分析・教材研究ではない。というのも、「作品と教材は違う。教材とは、授業において、ある目標を目指すために使われる「道具」であり、「なにを」「いかに」授業に生かしていくかという事前の作業が教材研究である」<sup>67</sup>からだ。ここで逢着してしまうのが、竹村氏の言う「教材（文学）で教える」／「教材（文学）を教える」問題（傍点ママ）<sup>68</sup>である。「で」「側につくのか」「を」側につくのか、あるいは、この二つを接続する途を探るか、このような問題に逢着しないように「国語科」のあり方を考えるのか。様々な考え方があがるが、稿者は竹村氏の言う「古典を伝えること」が「古典で伝えること」でもある地平<sup>69</sup>を探っていきたいと考えている。新たな古典学習に向けて、ここまでのことを踏まえて、以下に三点のことについて述べたい。

まず一点目は『宇治拾遺』観の更新についてである。高等学校用国語教科書中の『宇治拾遺』に関する記述や学習のてびきに見られたように、教科書中の『宇治拾遺』は未だに「人々の生活をうかがう」資料で、「庶民性・平俗性」を特徴とするテキストであった。他にも、学習者や教員が目にする「国語便覧」にも『宇治拾遺』の特徴として、「世俗説話に特色が見られる」<sup>70</sup>との記述が見られるし、教員用の指導書には「鎌倉期という変革と激動の時代に、人間の実態を日常的な感覚においてとらえようとする」<sup>71</sup>などの記述も見られる。つまり、中等教育の現場で教員や学習者が目にするテキスト（＝教材）には、旧態依然とした『宇治拾遺』観しか記述されていないのである。

教材研究を行う教員はこのことを十分に知っておく必要があると思われる。この『宇治拾遺』観でもって教材研究にあたらうとすれば、説話内容や書き手の応答を歪曲してしまうことになるであろう。教材研究をする際に、教員は本稿で見た先行研究を参照しながら『宇治拾遺』観を更新しておく必要があるだろう。

二点目は、教材分析の方法についてである。これまで見てきたように、『宇治拾遺』は各章段の出来事の展開を追うのに労を要することはない。が、『宇治拾遺』は「読者の才に応じて多彩な風貌を覗かせる」のであった。逆に言えば、我々が『宇治拾遺』の「多彩な風貌」をのぞき見るためには、「才」（＝知）がなければならぬのである。第一段、第十二段に関しては、「才」（＝知）がなければならぬのである。第一段、第十二段に関しては言えば、待遇表現（文法的知）、「生生世世」や「喜悅」などの語のニュアンス（語彙的知）、比叡山僧に関するモノ・コトや僧と児の関係（歴史的知）、道祖神（民俗的知）、自利・利他・読経（仏教的知）があつてはじめて、読み手は、道命と道祖神とのやりとり、僧と児とのやりとり以外のことを読みとることができるのである。これを鑑みれば、『宇治拾遺』を教材として扱う際に、教員は単語の意味や文法事項は勿論のこと、登場人物のことや扱われている出来事に関する歴史的知、各章段に関係する思想、仏教的知、民俗学的知、政治的知、文学的知、宗教学的知、などを辞典類、事典類、先行研究、データベースなどで調べながら、「四」で挙げた観点を以て分析をしていく必要があるだろう。山藤夏郎氏の言を借りて言えば、「中世」のリテラシーは、古典の再現前（再編集）を実践規範とするものであったため、書かれたものは、（明示的に註釈という形態をとっていないものであつたとしても）潜在的（潜在的に古典世界と必ず連結<sup>72</sup>）していることで、「古典を読む」ということは古典世界を読むということ」（傍点ママ）<sup>72</sup>になるのである。とすれば、『宇治拾遺』は表層的な容

易さとは相反して、存外、分析の難しいテキストであり、かつ、一義的に内容を総括しにくいテキストなのである。

但し、これは『宇治拾遺』のみに要請されることではない。他の説話集テキストにおいてもそうであるし、説話集テキスト以外であっても、前述したような知を身につけながら、語り方や同一テキスト内の他の箇所との関連などを見ていく必要がある。

三点目は古典学習についてである。『宇治拾遺』には様々な表現の仕掛けがあり、それに気づいた読み手に応じて「多彩な風貌」を見せるテキストとしてあつた。この点を活用して、学習者が読みの観点を獲得することを目的とした学習が出来るのではないだろうか。例えば第十二段、前述したようにその前後を含めた説話排列は性的な話題が並べられていた。説話排列によって形成された文脈において第十二段を読めば、読み替えが起こり、「大らかな人生のユーモア」を語った説話とは異なる「風貌」を垣間見ることが出来るであろう。同様に僧の児に対する待遇表現や第一段における道祖神の喜悅する様子など、登場人物の言動に注目することでも読みを揺らがせることができるし、第十二段の僧と児というモチーフ性、第一段の道祖神や道命に対するモチーフ性を持ち込んでも読みを揺らがせることが可能であろう。このように着目する点を示しながら、説話の読み替えを行っていくことで、学習者に読みの観点を獲得させることを目的とした学習を仕組むことが可能となろう。その際、山元隆春氏に代表されるこれまでの文学教育の成果<sup>73</sup>や、読みの観点を提示した文学研究の成果<sup>74</sup>をこれと接続していけば、古文テキストを特殊化しないかたちで学習の提案をしていくことが出来るのではないだろうか。

ここでいう読み替えとは、読む視点が変わり読み取った内容が変わるだけではなく、読みの次元が変わってくるということである。単語

や文法に注意して説話内容を読み取る段階から、表現の仕組みを読み取り、どのような問題領域に対して、どのような言説を参照したり、それらとどのような対話を繰り広げ、応答をしているのかを読み取る段階へ<sup>75</sup>。それぞれの段階において目指される読みの次元は当然ながら異なる。表現のしくみに注意することで、読みの次元を学習者に意識化させるための学習を行うことも可能であろう。

また、教員の側でいえば、読みの次元に意識的になることで、他のテキストと比較させる際に、比較の観点を明らかにさせることもできる。或る問題領域に対する応答のあり方を比較させるのか、対話過程を比較させるのか、語り方を比較させるのか、〈知〉の有様を比較させるのか。また、それらの学習活動を通じて、学習者自身にどのような対話に参入させるのか。これらのことを意識化することができ、「古典化」(「カノン化」)されたテキストであるからという理由とは異なる理由で古文テキストを学習者に提供することが出来るようになるであろう。

更に、『宇治拾遺』のみならず、他ジャンルのテキストを視野に入れ、同様に分析をすることによって、「テキストから無常観を読み取る」といった類の古人の声を収奪するのではない、古人との〈対話〉を繰り広げることができよう<sup>76</sup>。

## 注

1 例えば、東京書籍『精選国語総合』では、「古文入門」単元の単元目標として、「説話のおもしろさを味わい、古文の世界に親しむ」が挙げられている。他にも「時代を超えて通じる人間性の機微を読み取り、説話のおもしろさを味わってみよう」(第一学習社『標準古典B』)、「困難に対処する知恵や機転のおもしろさを味わおう」(大修館書店『新

編古典B』などの言が見られる。

2 竹村信治『言述論—For 説話集論』(笠間書院、二〇〇三年)、570頁。

3 「編集後記」(『国語と国文学』第九十二卷十一月、二〇一五年十一月)

4 竹村信治「研究者が国語教育を考えるとということ—「言説の資源」をめぐる」(『リポート笠間』第五十七号、二〇一四年十一月)

5 近年の説話研究の状況を踏まえると、何を説話集テキストと認定するかという問題もあるが、ここでは、『説話の講座第四巻 説話集の世界I—古代—』(勉誠社、一九九二年)、『説話の講座第五巻 説話集の世界II—中世—』(勉誠社、一九九三年)に立項されているテキストを説話集テキストと認定した。

6 『沙石集』や『発心集』なども所謂仏教説話集であるが、これらから選ばれる章段は難解な仏教教理を排した所謂世俗的な章段が選ばれている。

7 『新国語総合ガイド 二訂版』(京都書房、二〇一一年)、81頁。後述のように「中世」に簇生した説話集テキストに〈民衆〉を見出すかつての説話研究の名残が教材に揺曳していることを、この「黄金期」という語が示している。

8 西尾光一『中世説話文学論』(塙書房、一九六三年)、88頁。

9 第一学習社『高等学校改訂版新訂国語総合古典編』

10 三省堂『精選国語総合』

11 教材採録状況を調べるにあたり、『高等学校用教科書目録(平成29年度使用)』(文部科学省、二〇一六年)に記載されている教科書を対象とした。また、章段名については、教科書に付されている教材名を参照した。また、『高等学校用教科書目録(平成28年度使用)』(文

部科学省、二〇一五年)に記載されている教科書を対象として、『宇治拾遺』を典とする説話教材を総覧したものと、竹村信治「教材発掘 No.6 宇治拾遺物語—序文を読む—」(『国語教育研究』第五十七号、二〇一六年三月)がある。それと比較すると、「国語総合」教科書においては、「信濃国聖事」(第百一段)、「博打子聾入事」(第百十三段)が姿を消している。

12 旧版日本古典文学全集(小林智昭校注・訳、小学館、一九七三年)の第十七段における「鑑賞と批評」

13 前掲注12、第百六十五段の「鑑賞と批評」

14 前掲注11、竹村氏論文を参考にした。

15 拙稿「教室で創られる〈古典〉—国語教育誌の中の〈古典〉—」(『論叢国語教育学』第九号、二〇一三年七月)でもこれに関して言

及している。また、説話集テキストに〈民衆〉を見出すという見方については別に検討したい。

16 例えば、前掲注8西尾氏著書、益田勝実「中世的諷刺家のおもかげ—『宇治拾遺物語』の作者—」(『文学』第三十四卷十二月、一九六六年十二月)、三木紀人「背後の貴種たち—宇治拾遺物語第一〇話とその前後—」(『成蹊国文』第七号、一九七四年二月)。

17 竹村信治「宇治拾遺物語論—表現性とその位相—」(『文芸と思想』第五十五号、一九九一年二月)、2頁。

18 このあたりの事情については、小峯和明「説話研究の現在」(『説話文学研究』第二十九号、一九九四年六月)や竹村信治「説話文学—『解釈と鑑賞』第五十三卷三号、一九八八年三月)、前田雅之「説話研究の現在」(『国文学』第四十六卷十号、二〇〇一年八月)に詳しい。

19 例えば、森氏の著書の中の「作品の生成」(『今昔物語集の生成』

和泉書院、一九八六年)には次のような発言が見える。

こうして問われているのは、今昔物語集の組織的「貫性」ではなく、言語の主体の作家的同一性ですらなく、言語表現の成立する根拠、また作品の生成していくしくみである。(中略)稿者「説話集」という作品を、生成する言語の世界としてとらえ、かつその生成の根拠をたずねようとする立場に立つとき、改めて編纂行為、説話行為、表現行為のしくみと、それらの関係が検討されるべきである。

(255-256頁。傍点、稿者)

- 20 佐藤晃「『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法」(『日本文芸論叢』第三号、一九八四年三月)、26頁。
- 21 佐藤晃「『宇治拾遺物語』の和歌説話―主題の相互関連性の視点から―」(『日本文芸論叢』第二号、一九八三年三月)、26頁。
- 22 前掲注20佐藤氏論文、30頁。
- 23 前掲注21佐藤氏論文、31頁。
- 24 佐藤晃「『宇治拾遺物語』における言語遊戯と表現」(『日本文芸論叢』第四号、一九八五年三月)、34頁。
- 25 前掲注24佐藤氏論文、37頁。
- 26 佐藤晃「演ずる主体―『宇治拾遺物語』の表現機構―」(『文芸研究』第百十九号、一九八八年九月)、48-49頁。
- 27 前掲注26佐藤氏論文、51頁。
- 28 荒木浩「異国へ渡る人びと―宇治拾遺物語論序説―」(『国語国文』第五十五卷一号、一九八六年一月)、8頁。
- 29 前掲注28荒木氏論文、9頁。
- 30 前掲注28荒木氏論文、15頁。
- 31 前掲注28荒木氏論文、17頁。
- 32 荒木浩「宇治拾遺物語の時間」(『中世文学』第三十三号、一九八八年六月)、76頁。
- 33 前掲注32荒木氏論文、77頁。
- 34 荒木浩「ひらかれるへとき」の物語―『宇治拾遺物語』の中へ―(『国文学』第四十卷十二号、一九九五年十月)、87頁。
- 35 森正人「編纂・説話・表現―今昔物語集の言語行為序説―」(『説話文学研究』第十九号、一九八四年六月)。なお、佐藤氏も自らの論文「『宇治拾遺物語』の表現機構」(『中世文学』第三十二号、一九八七年五月)で注に前掲の森氏の論文を引いており、森氏の手法に学んだとおぼしい。
- 36 以上、森正人「場の物語としての宇治拾遺物語」(『日本文学』第三十六卷二号、一九八七年二月)。
- 37 以上、①森正人「宇治拾遺物語の本文と読書行為」(有精堂編集部編『日本の文学 第五集』、有精堂、一九八九年五月)、②同「宇治拾遺物語の言語遊戯」(『文学』第五十七卷八号、一九八九年八月)。
- 38 前掲注36森氏論文、57頁。
- 39 前掲注37森氏①論文、115頁。
- 40 小峯和明「宇治拾遺物語の表現時空―ひしめくもの―」(『国文学研究資料館紀要』第十五号、一九八九年三月)
- 41 小峯和明「宇治拾遺物語と「猿楽」(水原一編『伝承の古層―歴史・軍記・神話―』桜楓社、一九九一年五月)
- 42 小峯和明「宇治拾遺物語論―へもどき」の文芸―」(『国文学研究資料館紀要』第十六号、一九九〇年三月)
- 43 小峯和明「宇治拾遺物語の表現時空」(若草書房、一九九九年)。
- 44 前掲注17竹村氏論文、7頁。
- 45 以上、前掲注17竹村氏論文、7頁。
- 46 以上、前掲注17竹村氏論文、14頁。

- 47 前掲注17竹村氏論文、25頁。
- 48 荒木浩「書評 竹村信治著『言述論— for 説話集論』」(『説話文学研究』第四十号、二〇〇五年七月)、162頁。
- 49 前掲注2竹村氏著書、6頁。
- 50 例えば、荒木氏は前掲注48の書評の中で次のように述べている。バフチンで『宇治拾遺』を再読する小峯和明氏の方法への、私の感触としてかつて記したように(前掲書評)(稿者注・荒木浩「書評 小峯和明著『宇治拾遺物語の表現時空』『立教大学日本文学』第八十六号、二〇〇一年七月)、バフチンのカーニバル的開かれた空間と多声(ポリフォニー)に対し、個としての黙読をイメージしてしまう私のバルト的『宇治拾遺』(163頁)
- 51 前掲注2竹村氏著書、75頁。また、(他者のことば)、「他者の言葉」。“ことばのジャンル”についてはバフチンを援用しながら次のように述べる。
- (他者のことば)∴説話は出来事や事柄とその意味付けを他者の発話に由来するものとして示しているの、以下、物語内容∥話題をこう呼ぶ(50頁)
- 「他者の言葉」∴(他者のことば)としてのそれではなく、“ことばのジャンル”としてのそれ(66頁)
- 52 前掲注2竹村氏著書、75頁。また、(語る主体)について次のように述べる。
- “演ずる主体”をいま仮に、(他者のことば)を語るその行為性にそくして(語る主体)と名づけければ、こうした言語行為の実際は、『宇治拾遺物語』の言述についての議論に(発話主体)と(語る主体)との区別の必要を要請することになる(58頁)
- 53 前掲注2竹村氏著書、76頁。
- 54 三谷栄一「説話文学の冒頭第一話と農耕儀礼—イザナギ・イザナミのミトノマグハヒをめぐる—」(『国学院雑誌』第八十四卷五号、一九八三年五月)、17・18頁。
- 55 前掲注37森氏①論文、107頁。
- 56 前掲注37森氏①論文、108頁。
- 57 前掲注37森氏①論文、108頁。
- 58 前掲注32荒木氏論文。
- 59 新大系、第三十五段脚注。
- 60 『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)「自利利他」項を参照。
- 61 前掲注11竹村氏論文、129頁。
- 62 第一学習社『高等学校新訂国語総合古典編 教師用指導書 第一分冊』、19頁。
- 63 前掲注11竹村氏論文。
- 64 小林保治・増古和子訳注『新編日本古典文学全集50 宇治拾遺物語』(小学館、一九九六年)、46頁。
- 65 三木紀人他校注『新日本古典文学大系42 宇治拾遺物語・古本説話集』(岩波書店、一九九〇年)、25頁。
- 66 難波博孝「S.T.『白いぼうし』論—死者の世界の出来事—」(『母語教育という思想—国語科解体／再構築に向けて—』世界思想社、二〇〇八年)、200頁。
- 67 「120 教材研究(田中俊弥氏執筆)」(大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書、二〇〇一年)、132頁。
- 68 前掲注5竹村氏論文、5頁。
- 69 前掲注5竹村氏論文、7頁。
- 70 前掲注7、173頁。

71 前掲注62と同。

72 山藤夏郎「2 リテラシー選良としての禅僧」(『(他者)としての古典―中世禅林詩学論攷―』和泉書院、二〇一五年)、25頁。

73 例えば山元隆春、『文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』(溪水社、二〇〇五年)や同『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』(溪水社、二〇一四年)。

74 例えば、石原千秋他編『読むための理論―文学・思想・批評』(世織書房、一九九一年)や土方洋一『物語のレッスン―読むための準備体操』(青簡社、二〇一〇年)。

75 このあたり、竹村信治「読みのヴァージョン―パフォーマンス評価の観点―」(『中等教育研究紀要』第六十二号、二〇一六年三月)を参考に行っている。

76 近現代とはことなる〈知〉の有様について言及しているものとして、前掲注72山藤氏著書や前田雅之氏の一連の論考がある。これらなども視野に入れば、従来の一面的な思想の読み取りとは異なる、古人との〈対話〉を仕組む古典学習が提案できるかもしれない。

※本文依拠文献は以下の通り。但し、一部表記を私に改めたところがある。章段数もこれによる。

新日本古典文学大系(岩波書店)：『宇治拾遺物語』

日本古典文学大系(岩波書店)：『古今著聞集』

日本古典文学全集(小学館)：『今昔物語集』

日本思想体系(岩波書店)：『法華験記』

『新注 古事談』(笠間書院)：『古事談』